九条の会．ひがしなだ ニュース

第 144 号

２０２１年
１２月２３日

事務局　西谷利文　Tel 080-1485-5603　E-mail　nishi-t@hm.h555.net

FK 元弁護士の“ここがポイント”

9条改憲論はアメリカ製

深草　徹

改憲論者は、９条はアメリカに押し付けられたものだということをよく言います。しかし、アメリカの押し付けを言うなら９条改憲をこそ問題にするべきでしょう。

アメリカが、日本再軍備の画策を始めたのは冷戦が深刻化した１９４９年ですが、それには９条の壁をどう乗り越えるかが最大の難問でした。９条改正により正面突破を図ることも検討されましたが、日本国内には９条改正の機運がないため、それは断念し、警察部隊の強化という名目で事実上再軍備を押し付けました。

アメリカ政府高官が公然と日本に９条改憲を求めるようになったのはもう少し後のことです。

１９５３年１１月１９日、大統領特使として来日したニクソン副大統領が、日米協会の会合で「１９４６年、憲法改正の形において、わが米合衆国は、日本に向って、いっさいの戦力の放棄を要求しました。だが、これこそは、米合衆国が犯したまことに重大な誤りであったのであります」と演説。

その５日後、ダレス国務長官が記者会見の席で、「１９４６年、わが国が日本に非武装化を要求したことを、誤りであったと告白されたニクソン副大統領のお言葉に、私も、全く同意見であります」と言明。

日本国内で、有力政治家が９条改憲を唱え始めたのはその直後のことでした。

９条改憲論は日本製ではなくアメリカ製であり、日本国民にとって百害あって一利なしです。

（深草憲法問題研究室主宰、九条の会. ひがしなだ筆頭代表世話人）

４回　兵庫の『語りつごう戦争』展に行ってきました

北嶋佳寿子

会場の妙法華院を目指して、JR 兵庫駅から歩きました。親切なお姉さんやおじさんに道を教えていただきながらも、遠かったこと‼けれど、日進上人碑と鯉の池、動物供養碑、眞盛丸の碑（大正 6 年 2 月 28 日、於地中海敵国潜航艇為撃沈）を見ました。

子どもたちと戦争コーナーでは、学童集団疎開について展示されていました。以前神戸空襲の被害地図に、武庫郡本山村大字森が川西航空機を狙う爆弾攻撃に巻き込まれて確かに被害を受けたにもかかわらず、記載されていなかったことがあり、当時神戸市ではなかった本山の小学校についても、ないわなあと思いながら見ていったら、最後にありました！

本山村本山第一国民学校・・・鳥取県大村、用瀬町（もちがせちょう）、散岐村
本山村本山第二国民学校・・・鳥取県西郷村、佐治村

なんと、親も 10 円負担しなければなりませんでした。

ちょうど、12 時になり、祈りの言葉を唱和しました。「戦争を志す者に反対する勇気を」

（九条の会.ひがしなだ　世話人）

「祈りのことば」

「第四四回」兵庫の『語りつごう戦争』展」開催に当たって、つつしんで全世界の戦争犠牲者の霊を追悼し祈りをささげます。

広島長崎原爆犠牲者の霊、神戸大空襲はじめ全国空襲犠牲者の霊、沖縄戦犠牲者の霊、中国はじめアジア各地における犠牲者の霊、総じて全世界の犠牲者の霊よ、その消えがたき加害の罪は懺悔によって滅せられんことを、その抜きがたき被害の苦しみは、神の愛、仏祖の慈悲、同胞の援護をもって救われんことを心悼みつつお祈り申し上げます。

いま生きながらえる私たち、あるいは戦争に生き残り、あるいは戦後に生をうけて平和に暮らす私たちは、ふたたびは戦争を起こさない、そして起こさせない決意と行動をもって、あなた方を慰霊し供養するものであります。

全世界が平和でありますように。地球上の核兵器が速やかに廃絶されますように。あらゆる国の総ての軍備が撤廃されますように。全人類すべての人が、暴力に走ることなく、我欲を制御して、個人の幸福が人類の幸福と調和する道を歩みますように。それに反する邪悪な心の迷いに動かされて戦争を志す者に対しては、敢然と諫め、反対する勇気を、私たちが持ち続けますように、祈りをささげます。

～～映画祭レポート～～

不死身の特攻兵と熱い女（ひと）
～神戸初開催の映画祭に寄せて～

山本　優

１２月４日（土）、５日（日）の２日間、新開地の神戸アートビレッジセンターで、「戦争の記憶と記録を語り継ぐ映画祭」が、東京以外の地域で初めて開催されました。

２日間で３本の映画および映像作品と、それにまつわる講演が行われました。

初日は十死零生の特攻命令を、９回命じられながらも、９回とも生還した佐々木友次氏をテーマにした「ラストメッセージ」が上映され、上映後は監督の上松道夫氏による講演でした。

特攻で、自らの命を散らさずに敵にダメージを与えることはできる、そして何度でもダメージを与えるほうが良い、との信念のもと、上官の命令に逆らうことで人間扱いされなくても、信念を貫いた佐々木氏の生き様に、心を動かされました。

また、亡くなる半年前に行われた、まさに題名通りの「ラストメッセージ」のインタビューを、現代に生きる我々は、決して忘れてはならないと感じました。

この映画祭は、２０代のころから借金をしてまで人々に平和のことを考えてほしいと願う主催者、御手洗志帆さんの熱い思いで、１０年間継続されてきています。その情熱に、何より心打たれました。

今後もこの神戸の地で、定期的に開催してほしいと願います。

（神戸市立中学校教員、東灘区在住）

レポート

私たちの個人情報を渡さない
～総会・記念講演に参加して～

松本のり子

「私たちの個人情報を渡さない神戸市民の会」の総会・学習会が１２月７日、こうべまちづくり会館で開催され、私も参加しました。学習会は、福岡市の井上顕弁護士（福岡弁護士会副会長）による、自衛隊に名簿提供することについての記念講演でした。

２０１９年１月、安倍元首相が自衛隊への名簿提供について、都道府県の６割が非協力」と国会答弁したことで、名簿提供が一気に増えましたが、さらに２０２１年２月５日、「自衛官募集事務に関する通知」を、自衛隊法９７条１項、同施行令１２０条に基づき、住民基本台帳の４情報の提供要請をしました。この背景には、自衛官不足の問題があります。昨今は毎年、１万人規模の自衛官が、いじめ・パワハラや自殺 etc などで退官しています。その補充に毎年、約４万人の応募が必要になるそうです。

自治体に、その提供の義務はあるのでしょうか?

国民の権利・義務を制約できるのは、国会だけ（憲法４１条）と規定されています。また、個人情報保護は、憲法１３条に基づくプライバシーの権利や公権力の行使から最大限、守られなければなりません。住民基本台帳、個人情報保護条例は、これを保護する趣旨の法令ですから、拡張解釈は許されません。

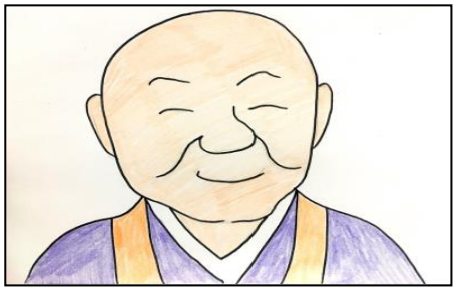
しかし、神戸市をはじめ多くの自治体が毎年、高校３年生、大学４年生の名簿を提供しています。私たちは、個人情報をわたさない神戸市民の会の一員として、引き続き声をあげていきましょう。

（東灘区在住、神戸市議会議員）

ハナ絵モンの思い

寂聴さんの言葉

関本（市川）英恵



作家・僧侶の瀬戸内寂聴さんが先月に逝去されました。私が見た追悼番組では触れられませんでしたが、平和を願い声を発し続けてこられた方でした。憲法については「もしも、日本が九条を守らないようなことがあれば、世界を欺き、うそをついたことになる。戦争しません、しませんって言ってきたのだから」とおっしゃっています。

また、原発についても「これまで生きてきて、福島の原発事故のような恐ろしいことは戦争以外に一度もなかった。政府は再稼働をどうして焦るのか。原発事故は人災であり、同じことを繰り返しては子どもや若い人がかわいそうです」と述べておられます。再稼働路線の岸田政権に噛み締めたいもらいたい言葉です。

政府を批判したり、声を発する必要性を訴えたりされてきた、とても貴重な方だったと思います。政府は寂聴さんを従三位に叙することを決めていますが、寂聴さんの言葉を受け止めることもしてもらいたいです。

（「憲法の歌」作詞者）

「世界で最もアホで、情けない裁判」

横山　順一

今、一つの刑事裁判を支援し、公判のたび、大阪地裁へ出向いている。「釜ヶ崎監視カメラ弾圧裁判」だ。

2019 年春、通称「あいりん総合センター」が建て替えを理由に、強行に閉鎖された。追い出された野宿者が、今もセンター軒下に数十人暮らしている。そこに「団結小屋」なるテントがあり、建て替え反対の人たちが出入りしている。彼らを監視するために警察はカメラを取り付けた。突発的に、レンズにゴム手袋やスーパーのレジ袋をかぶせた人がいた。壊した訳ではない。ただ一方的に撮られるのが嫌でなした、言わばささやかな抗議の声だった。

こんな微罪で、何と 6 人が逮捕され、4 人が起訴され裁判が続いている。脚立の足を支えた人も含んで。明らかに、行政主導のセンター建て替え反対派の運動つぶしに他ならない。来年早々判決が出る予定だが、万が一負けるようなら、未来はない気がする。もちろん、どうなろうとも労働者の町を守りたく、釜ヶ崎の仲間たちと志を共にしたいと思っている。

（東神戸教会　牧師）

一中学生の記憶（昭和 20 年 6 月 5 日）神戸大空襲被災の記　①

被災するまでの家族の状況

吉本圭介

神戸空襲慰霊碑（中央区大倉山）

昭和 20 年 6 月 5 日は、第２次世界大戦で一家がアメリカの大型戦闘爆撃機 B29 による爆撃で焼け出された日である。一昨年の小学校同窓会がたまたま 6 月 5 日だった。70 年以上前の話で忘れている事が多いが、記憶を頼りに筆を執ることにした。

その頃、同じ屋根の下で暮らしていたのは、父（53 歳）、母（48 歳）、姉（21 歳）と祖母（75 歳）、そして中学 2 年生の私（13 歳）の 5 人であった。もう一人の家族である兄（19 歳）は、学徒動員で北海道の旭川に。

この 6 月 5 日の大空襲では、運良く誰も怪我も無く生き延びることが出来たが、住み慣れた東須磨の一帯は見渡す限り焼け野原となった。我が家も無論跡形もなく焼け落ち、その跡地を探すのに苦労するほどであった。

空襲の実情を書き残す前に、まず祖母について書かねばならない。こんなことがあった。戦争が激しくなる前は、母の弟である伯父一家の家族とともに祖母は大阪に住んでいた。3 月の神戸大空襲の 4 日前の 3 月 31 日の深夜、大阪市を中心とする爆撃で、死者 4000 人、被爆者 50 万人に及ぶ大阪では最も大きな大空襲に見舞われた。祖母の住んでいた地域も炎と煙に覆われ一家は逃げ延びたが、祖母は家族からはぐれてしまった。探し続けた伯父からの連絡でも明るい知らせは聞けなかった。

（川西市在住）

今号から、吉本さんの神戸空襲体験記を連載でお届けします。　写真は「神戸空襲を記録する会」より